

D—14 家政学における家族関係
—家族の結合と機能— 第1報

東京家政大 田中 靖子

1. 今日「家政学」なる詞が使われているが家政学にはその研究分野が限定されず、拡大された範疇で、当然他の科学として成立している研究をも含み雑居の観を呈している。このような状態の下で上村哲弥教授は「家庭社会学」と酷打って科学的洞察、実践的知識、健全な心的態度の形成を総合的に考察している。さらに、家庭社会学においては、特に Family living の研究をその中心テーマとしている。この中における家族の人間形成を極限とするとき、家族の内外の構造の研究が重要な意義をもつものと考えられる。このような観点から家族の構造、結合および機能を分析する。

2. 今回は、特に都会（東京都）と地方各地を比較対象する。地方を面接法により調査し、その結果と都会地の家族の構造、結合および機能を分析し、Mowrer の結合状態といかなる相違が見られるか検討する。

3. 家族の構造を核家族、複合家族に分けると、都会地の核家族大多数に比較し、地方では複合家族の拡大家族が多い。結合状態は、一般に伝統慣習の強い地方にては行事、宗教、世襲的職業等によるものが多い。そこで家父長的でピラミッド型となる。都会地では、現在ある家庭を第一主義に、本人本位の意識が強く職業も広い分野に分散しているので横の結合が強く、機能の分散が著しい。